

進捗状況の概要（2ページ以内）

① 大学改革の加速

本学の事業は、学生のアクティブ・ラーニング（AL：主体的学び）の基盤となる自律学修マインドの醸成にその目的がある。これまでの改革の取り組みによって、以下の数値目標が達成されている。

	H26 年度実績	H30 年度実績	R1 年度目標
アクティブ・ラーニングを導入した授業科目数の割合	12.2%	23.0%	25.0%
アクティブ・ラーニングを受講する学生の割合	58.7%	100.0%	100.0%
学生1人当たりアクティブ・ラーニング科目受講数	1.5 科目	4.5 科目	2.2 科目
アクティブ・ラーニングを行う専任教員数	89 人	167 人	150 人
学生1人当たりのアクティブ・ラーニング科目に関する授業外学修時間	2.3 時間/週	5.0 時間/週	4.0 時間/週
アクティブ・ラーニングに関する FD 受講者数	16 人	220 人	23 人
優れたリーダーシップを持つ学生の養成数	289 人	982 人	900 人
図書館の利用者数（年間延べ）	105,418 人	123,416 人	-
自律学修室（全学 SALC・学科 SALC）利用者数	76 人	1879 人	-
自律学修室（全学 SALC・学科 SALC）利用時間	111 時間	2990.5 時間	-

H30 年度において、事業開始時に比べてほとんどの目標を達成している。AL を導入した授業科目（以下 AL 授業）は着実に増加し、本学のすべての学生は各学年で AL 授業を受講している。また、各科目の課題（レポート）作成に連動して、図書館及び自律学修室（全学 SALC・学科 SALC）の利用者数および利用時間は増大し、単位の実質化に結びついている。この際、各 SALC に待機しているファカルティデベロッパー（FDer）および学生ファシリテーター（学生 FC）は、英語教育施設 SILC/SALC で培われた「学習アドバイジングスキル」を活用して、学生の自律学修マインドの醸成に寄与している。さらに、本事業での留学ファシリテーター（留学 FC）の国際交流センターへの配置によって、H26 年度の年間 22 名であった海外への留学生数は、H30 年度には 273 名に増加し、学生の主体的な学びの醸成に寄与している。

本事業での各学科での AL 授業の増加は、R1 年度から実施している「崇城大学教育刷新プログラム II（SEIP-II）」において、学則別表の改訂を伴う各学科の「SOJO プロジェクト科目群」の設置に結びつき、授業で修得した知識を活用して「答えのない課題に主体的に取り組む」AL 授業群の各学年への配置に結実した。さらに、H30 年度に竣工した新棟の中に、AL 授業推進のための AL 専用の教室（20～150 名くらいまで利用可能）を設置した。また、この SEIP-II では、SOJO ポートフォリオ（e-ポートフォリオ）を稼働させているが、本事業の中間評価で指摘された「学生の主体的学びの達成度の指標の明確化」の課題に対応するために、全学の全科目に対して「学修到達度ポートフォリオ」を実施し、学生による振り返りを指標の一つとして、事業の改善に結びつける予定である。さらに、FDer への学習アドバイジングスキルの研修を兼ねた FDer 錬成会（学生 FC も参加）は、本学に初めて着任した大学教育実績の不足している新人教員（企業からの実務家教員や博士号取得直後の若手教員など）への FD 活動「大学人教育力養成講座」（3 年前より実施）に発展している。このように、本事業を推進する中で、大学全体の教育改革が加速して進行している。

② 事業の実施体制

事業推進責任者（松下副学長）は、事業推進代表者（中山学長）と毎週会議の時間を設け、本事業ならびに大学の教育改革全般について連絡を密にとっている。また、事業推進責任者は、FD 委員長や総合教育センター教員、事務局次長、教務課長及び教務課員で構成される AP 運営委員会メンバーと適宜、推進事業について協議を計りながら、毎月開催される FD 委員会で、事業の実施について審議・検討を行っている。この FD 委員会のメンバーは各学科から選出されている FDer が中心となってお

（テーマ：I、大学等名：崇城大学）

り、FDer が各学科の学生 FC と協力して、全学 SALC・学科 SALC の運営、FDer 錬成会の開催等の本事業の実施を、AP 運営委員会メンバー（教務課職員を含む）とともに担当している。この FDer 錬成会や、FD 委員会が開催するアクティブ・ラーニングや学習アドバイジングスキルを全学に普及させる FD 講演会は、教職員も多く参画している。

各年度末には、AP 運営委員会を中心として事業取組報告書を発行し、自己評価を行うとともに、2 名の外部評価委員（1 名は大学高等教育の専門家、1 名は卒業生が多く就職している企業トップの方）から、毎年客観的評価と取組改善へのサジェスチョンをいただいている。また、本事業の中間評価でも指摘された PDCA のための (C) の一層の強化のために、H30 年度より客観的指標の一つである学生の「社会人基礎力」（前に踏み出す力「主体性」を含む）を評価する外部テストを実施している。さらに、本学 IR（総合企画課）が、全在生を対象にしたアンケートを実施し、大学での授業終了後の滞在時間、滞り場所、活動内容等について調査をしている。これらの結果を本事業に活用し、今後、PDCA サイクルを機能させる。

③ 事業の実実施計画・継続性

上述の数値目標の達成具合から評価して、事業は計画に基づき実施されていると自己評価できるが、学生 FC の勤務状況に、月によるばらつきや、学科によるばらつきがあり、その修正（予算執行の状況を見ながら、適宜学科にフィードバックすること）が十分にはできていない。毎年、学科 SALC の利用状況は確実に増加しているため、今後は、毎月の実施状況をこまめにチェックし、学科毎の活動状況のばらつきが無いようにフィードバックできると思われる。また、本事業終了後も、事業実施の中心である FD 委員会は、FDer および学生 FC の選出とともに継続的に全学 SALC・学科 SALC の運営を担当することとなっている。さらに、本事業および SEIP-II 改革の検証組織である教育改革推進・検証会議（仮称）が、R1 年度発足することが決定し、メンバーも決まった。この FD 委員会および教育改革推進・検証会議（仮称）を中心に、本事業の継続を行っていく予定である。

事業継続のための予算措置としては、学生 FC への謝金が必要であるが、すでに学内の TA (Teaching Assistant) 費とともに、学内予算で確保することとなっており、現状の事業は縮小することなく実施することが可能である。

④ 事業成果の普及

本事業で他の大学等に波及しうる点は自律学修マインドの醸成につながる「学習アドバイジングスキル」の全授業科目への適用のノウハウと、それを全学生の教育に活用するための FDer と学生 FC の存在・育成にあると思われる。現在、「学習アドバイジングスキル」は、これを学内外に普及させるためのガイドブックの作成に着手している。また、FDer の育成は、2 か月に一度の FDer 錬成会を継続的に開催し、これを近隣の他大学（熊本保健科学大学および熊本学園大学など）にも開放し、社会的な取組に発展している。上記両大学とは、すでに大学間包括協定を締結し、事業の開催・広報がしやすくなり、また継続性が担保されている。さらに、下級生の自律学修を支援する学生 FC の研修は、毎年度末に次期学生 FC の研修会が定例化しており、上述のように研修のための予算確保も TA 費の一環として予定されているので、長期的にも継続した取組になると思われる。

⑤ 選定されたテーマの取組を中核にした総合的な大学教育改革の取組

本 AP 事業の実施に伴って、同じ AP テーマで採択された徳山大学とともに中間報告会を開催し、徳山大学のルーブリックの取組を参考に、SEIP-II 教育改革の中で本学の SOJO ポートフォリオの構築を行った。このポートフォリオでは「入学時自己診断シート」による入口での学修への動機付けを行い、「面談カルテ」で各学年でのチューターによる面談で学生の学修意欲をフォローアップし、さらに、「各授業の学修到達度ポートフォリオ」で、主体的学びの達成度を振り返るようにしている。この SOJO ポートフォリオと本 AP 事業、そして IR 部署による全学生への「学びのアンケート」および各学年で実施を予定している「社会人基礎力」（特に前に踏み出す力の評価、R1 年度は 1 年入学時に実施予定）テストで、入口から出口までの質保証を伴った大学教育を実現するように取り組んでいる。